

キャンプ体験が幼児教育者を志す女子高校生の自然に対するイメージに及ぼす影響

伊藤 さおり（生涯スポーツ学科 野外スポーツコース）

指導教員 黒澤 毅

キーワード：キャンプ体験、幼児教育者、女子高校生、自然に対するイメージ

1. 序論

近年、幼児教育の現場での自然体験の必要性が、幼稚園教育要領¹⁾に明記されている。このことから幼児教育者は自ら自然の中で活動し、野外教育を経験することで自然に対して十分な理解を得、子どもにその重要性を伝えなければならないといえる²⁾。神崎³⁾は、小学校5,6年生を対象としたキャンプを通して、自然に対するイメージの向上が自然に対する認識を高めたと報告した。

そこで本研究では、幼児教育者を志す女子高校生の、キャンプ体験における自然に対するイメージの変化を明らかにするとともに、ストレスとの関連について検証することを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】2010年7月21～23日に実施された0女子高等学校幼児教育コースキャンプに参加した1年生90名を実験群、同校のキャンプに参加しなかった1年生91名を統制群とした。

【調査用紙】

1) 神崎³⁾が作成した「自然に対するイメージテスト」から10対の形容詞対を採用し、刺激語は「森」、「水(湖)」、「火」、「虫」の4つを選出して「自然に対するイメージ調査」を作成した。

2) 新明ら⁴⁾が作成した「ストレス反応尺度」の13因子から、質問項目1項目(合計13項目)を筆者が独自に選択・修正し、「ストレス調査」を作成した。

3) 子どもが自然の中で活動することの必要性、また、毎日の不安・生活環境好感度・楽しさについて、4段階で評価する「キャンプについてのアンケート」を筆者が独自に作成して用いた。

表1 調査時期

	キャンプ1ヶ月前	キャンプ1日目	キャンプ2日目	キャンプ3日目	キャンプ1ヶ月後
自然に対するイメージ	実験群 ○	統制群 ○	○	○	○
ストレス	実験群 ○			○	
自然の中で活動について	実験群 ○				
キャンプについて	実験群 ○	○	○	○	

3. 結果と考察

1) 実験群の自然に対するイメージについて、5回の調査時期を要因とした分散分析を行った結果、自然に対するイメージの向上がみられた(表2)。

表2 自然に対するイメージ得点の平均と標準偏差と分析結果

	キャンプ1ヶ月前	キャンプ1日目	キャンプ2日目	キャンプ3日目	キャンプ1ヶ月後	F値
	M(SD)					
森	26.22(3.97)	26.01(4.53)	28.36(5.62)	28.74(5.37)	28.01(4.62)	13.32**
水(湖)	27.54(4.84)	27.41(5.51)	29.91(5.48)	30.05(5.64)	28.22(4.89)	13.20**
火	25.73(3.71)	25.98(4.04)	27.90(4.52)	27.92(4.53)	27.80(4.05)	12.05**
虫	21.10(4.59)	21.50(4.62)	23.03(4.70)	22.92(4.86)	23.09(4.70)	7.17**

向上した要因として、キャンププログラムにおける直接体験、初体験、環境への適応、仲間との協力体験が考えられる。またキャンプ直後に有意に向上した「森」、「火」、「虫」に対するイメージ

はキャンプ1ヶ月後まで維持されたが、「水(湖)」に対するイメージは維持されず有意に低下した。「水(湖)」は「森」、「火」、「虫」に比べて普段の生活で最も利用されるが、キャンプで関わった「水(湖)」と普段の生活で利用する水の違いが影響していると考ええる。

2) ストレスについて2回の調査時期を要因とした分散分析を行った結果、有意な減少がみられた。キャンプでの環境や活動にストレスを抱いていたが、直接自然と触れ合い、仲間と共に活動することによって解消されたと考える。

3) キャンプ1ヶ月前と3日目の自然に対するイメージ得点をそれぞれ高得点群、低得点群に分類し、ストレス得点の変化を分析した結果、群の間で差はみられなかったが、どちらもストレス得点は減少した。参加者のストレスは、自然に対するイメージの高低に関わらず減少することが分かった。また、キャンプ1日目と3日目の自然に対するイメージ得点をそれぞれ高得点群、低得点群に分類し、キャンプ中の不安得点、生活環境好感度得点、楽しさ得点の変化を分析した。その結果、高得点群は低得点群に比べて、キャンプ中の不安は有意に減少し、キャンプでの生活環境好感度および楽しさは有意に向上した。キャンプ中の不安については、キャンプ初体験の参加者が多いことから、不安は大きかったが、キャンプの経過につれて慣れ、不安は解消されたと考える。生活環境好感度については、直接触れることで好感度が向上し、環境へ適応していったと考える。楽しさについては、仲間と共に活動することで協力や団結をし、自分自身も技術の習得などで自信を持ったと考える。

4) 子どもにとって自然の中で活動することは、キャンプ前後ともに必要であるという回答がみられたが、キャンプを通じた直接体験から得た感動を子どもに伝えたいと考えるようになった。

4. まとめ

キャンプ体験は幼児教育者を志す女子高校生の自然に対するイメージを向上させ、ストレスを減少させる効果があるとともに、自然に対する認識を高め、子どもにとっての自然体験の必要性への理解を深めるものであった。

5. 参考文献

- 1) 文部科学省(1999):幼稚園教育要領
- 2) 西島大祐(2007):幼児教育者養成プログラムとしての組織キャンプの可能性. 鎌倉女子大学紀要, 14, 97-102.
- 3) 神崎清(1981):野外教育の効果についての研究-特に自然に対する興味・知識・イメージの変化について-. 筑波大学大学院体育研究科修士論文.
- 4) 新明理恵・坂田成輝・矢高直美・本間昭(1990):心理的ストレス反応尺度の開発. 心身医学, 30(1), 29-38